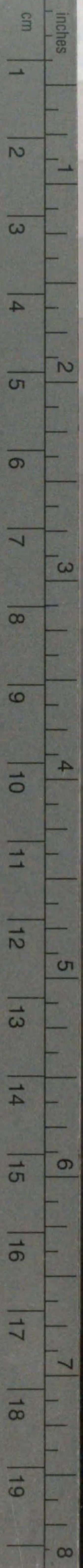


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教行信證 (化身土卷)

杉 紫 朗

教 行 信 證 (化身土卷)

杉

紫

朗

目次

第一 一卷の梗概	三	第四 真門の教義	三
一、方便教義	三	一、二十願意	三
二、本文の所説	五	二、彌陀經の開説	三
三、方便の語義	七	三、真門施設の所由	三
第二 化土の説明	一〇	四、真門の因	三
一、報土と化土	一〇	五、真門の果	三
二、化土の相狀	一〇	六、不定聚の機	三
三、化土の名稱	一七	七、難思往生	三
第三 要門の教義	一九	第五 聖道の批判	四
一、十九願意	一九	一、聖道門	四
二、觀經の開説	二二	二、三時の通塞	四
三、要門施設の所由	二二	三、末法燈明記	四
四、要門の因	二四	第六 外道の批判	四
五、要門の果	二六	一、外道の諸相	四
六、邪定聚の機	二九	二、批判の大意	四
七、雙樹林下往生	二九	第七 後序の大意	四

第一、一卷の梗概

一 方便教義

『教行信證』の第六、化身土の卷は具さな名稱を「顯淨土方便化身土文類」と題せられて、前五卷の眞實教義に對して方便教義を示されたものである。『歎異鈔』に

おほよそ聖教には眞實權假ともにあひまじはりさふらうなり、權をすてゝ實をとり、假をさしおきて眞をもちゐるこそ、聖人の御本意にてさふらへ

とある如く、聖教のお説には眞實の教義と、權假即ち方便の教義とがある、これを明らかに辨別することは何よりも大切なことである。いまこの化身土の卷あつて、方便教義を明らかにして、前五卷の眞實教義と比較して、眞實教義そのものゝ眞相は明らかにされて其尊さは知られ、又我等が眞實教義を知り得たことも苟の事（かりごと）でなかつたことも知らるのである。物は正面から見たばかりでは充分に分りかねる。必ず反面から見ることを忘れてはならない。また其物ばかり見るよりも他と比較して見て其姿はつきりする。紫と朱とを比較して眞の朱の色は知らるゝ。化身上の卷の使命は反面から眞實教義を見ることであり、朱に對する紫の役割をなすものである、方

便、眞實を分別して、眞に眞實が知れて、眞實法の尊さ、眞實法にこもる佛の恩徳を知ることができ、更に又事の成るは成るの日に成るのでなくて、其由つて來る所に遠いものがある。我等が今眞實教義を知り得たのは、そこまで我機を調へ熟さしめらるゝに、佛の容易ならぬ力が添へられてある。それが教法としては方便教義である。故に方便教義を知ることにて、眞實法に遇ふことが、いかに容易ならぬことであり、遇ふたことを如何に喜ばねばならぬか知られるのである。其方便教義と呼ぶるゝものは、要門と名づけらるゝ法と、眞門と名づけらるゝ法とである。其要門は往生淨土の爲に自力であらゆる善根功徳を勤め、其力を以て往生しやうとするのであり、眞門は自力でお念佛申して、其力で往生しやうとするのである。此二つは善根功徳が充分つとめられ、お念佛の功積もるならば往生ができないことはない。しかし、眞實の彌陀の淨土へは、眞實の彌陀の力によらなくてはできない。我々衆生は凡夫である。凡夫には眞實はあり得ない、故に凡夫の力では往生できないのである。これが彌陀の淨土へは彌陀の他力をたのまねばならない所以である。にも關らず、自方の善根功徳や、お念佛の功をたのんで往生しやうとしても、眞實の淨土へは往生できやう理由がない。

そこで佛は眞實の淨土の上に、それより一段下つた淨土を化現し、衆生は其淨土に往生し、それを感見するのである。其淨土を化土と云ふ。其化土に在す佛を化身と云ふ、合せて化身土と云ふのである。因果相順の理はどうかうしても、こうなくてはならぬ。前五卷に示された眞實教義が眞實の報土へ往生し、眞實の佛身を見たとまつり

等しく大涅槃の妙果を證するものと大に異なる。此結果の相違を先づ標榜して教義の眞實、方便を明らかにせんために方便化身土と題し、本文先づ化身土の何者なるかを示された、但し其教義は要門、眞門の教義であつて、其要門は彌陀の四十八願中の第十九願に誓はれた教義であるから、其願名の至心發願之願と、眞門は第二十願に誓はれた教義であるから、其願名の至心回向之願とを卷頭に先づ標示し、其要門である至心發願之願は彌陀の本意に違する自力の善根功徳によりて往生せんとする邪定聚の機が化土に往生するのであつて、それは『觀無量壽經』一部に廣く説示された教義であるから、其旨を細註して「邪定聚機、雙樹林下往生、無量壽觀經之意也」と云ひ、次に眞門である至心回向之願は眞實の教法たる念佛を修しながら、それを自力の善根ととりなして、眞實の報土に往生し得ず、化土に止まるものであつて、それは阿彌陀經一部に説かれてある教義であるから、また其旨を細註して「不定聚機、難思往生、阿彌陀經之意也」と云はれてある。かく要眞二門の教義を先づ掲げ出して一部が何を云はんとするものであるかを示された。

二 本文の所説

次に本文は七段に分かれて、先づ第一に化身土は何であるかを示された。即ち化身は『觀經』眞身觀に説かれた佛であり、化土はまた『觀經』所説の淨土であつて、懈慢界とも疑城胎宮とも呼ばれてあるとしてある。第二

(本一丁右、然濁世群萌已下)には要門法たる十九願の意が示されてある。即ち釋尊が『觀經』を説き、阿彌陀如來が十九願を誓ふて、方便の教義を設けられた思召しから説き起して、其十九願文及び成就の經文、其他これに關する御文が詳しく擧げられてある。第三(本六丁右、問大本三心已下)には『大經』に説かれてある本願の三心と、『觀經』に説かれてある三心との一異を論じられてあるが、これは『觀經』が如何なる説き方のなされてある經であるかを明らかにして、其經に示された要門の安心と行業とを詳かにしたものである。第四(本十九丁右、又問大本觀經三心已下)には『大經』『觀經』の三心と『阿彌陀經』に説かれてある一心との一異を論じられてあるが、これは『阿彌陀經』の如何なる經であるかを明らかにして其經に示された眞門教義の大體を説明されたものである。第五(本廿一丁左、夫濁世道俗已下)には眞門法たる二十願の意が示されてある。即ち眞門の安心、行業から、釋尊が『阿彌陀經』を説き、阿彌陀如來が二十願を誓ふて、眞門方便の教義を設けられた思召を示し、二十願文及び其義を顯はす多くの經釋の文が列ねられてある。第六(本三十三丁左然據正眞教意已下)には聖道門の批判がなされて、末代の劣機に於ては其利益を見ることの困難な教法であることを、經釋の説によりて論證されてある。第七(末初より三十九丁右まで)には外道の批判がなされてある。外道の説は多く祈禱卜占等によつて、現世の壽福を得んとするものであるが、それは理由なき邪偽異執の説であることを多くの經釋によつて明らかにされてある。已上で化土卷は終つたわけであるが、最後(本三十九丁右、爾以聖道已下)に『教行信證』一部の條起を記されたもの

と見るべき後序の文が置かれてある。これは一部に亘ることである。故に『化土卷』としては要門、眞門の教義を正しく方便教義として、其論が聖道、外道に及んで、これまた方便に屬すべき義ありとして示された上の七段が正しく此卷である。

三 方便の語義

こゝで方便と云ふ語義を明らかにして置きたい。方便と云ふ語は佛教ではいろいろの場合に使用されてあつて一概することはできないが、諺には「虚言も方便だ」と云ふやうなのがあつて、方便とは虚言いふことだとすら考へられてあるが、これは甚だしい誤解である。虚言は妄語であつて十惡の一であるが、方便はあるべき意義ある正常なことであつて同視すべきものではない。其方便の語義は具さに論ずれば可なり面倒になるから、暫く慧遠の『大乘義章』や『無量壽經義疏』によると、四種方便を明かしてある。四種と云ふのは進趣、施造、權巧、集成である。進趣方便と云ふは、眞理を證見すると云ふ結果に進むべき準備をなすことを方便とするものである。施造方便とは平等の眞理を見た上に、更に差別を見る智慧を起して、自利々他の諸行を巧に修することを云ふ。權巧方便とは衆生に應じて權に現して巧みに化益することを云ふ。集成方便とは諸法が同體であるからして巧に相集つて成立して居ることを云ふ。眞如中に恒沙の佛法が具して居る如きであると云ふと云ふ意味に説明

されてある。其他吉藏の『勝鬘寶窟』親基の『法華玄贊』などには五種、三種等の説がある。そこで方便と云ふ文字は一概に考へることはできない。眞宗の聖教の上に用ひられた方便の文字も種々な場合がある。善導の『般舟讚』に「釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり、種々の方便をもて、我等が無上の信心を發起せしめたまへり」とあるのは巧みな方法を以て衆生を化益したまふ佛大悲の妙用を意味するのであつて、其施さるゝ法門は權假の法より眞實に及ぶものであらう。所が宗祖が『和讚』に「釋迦彌陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひけり」と示されてある如きは語は『般舟讚』に依られてあるが、意味は釋迦の發遣、彌陀の招喚によつて、他力無上の信心が與へらるゝことであるから、眞實法を施さるゝ化益を示されたものである。

また『論註』下八丁に「方便と言ふは謂く作願して一切衆生を攝取して、共に同く彼の安樂佛國に生ぜしむ。彼の佛國は即ち是れ畢竟成佛の道路、無上の方便なり」とあり、其次に智慧、慈悲、方便の三門の方便を解釋して「正直を方と曰ふ、己を外にするを便と云ふ。正直に依るが故に一切衆生を憐愍する心を生ず。外己に依るが故に自身を供養し、恭敬する心を遠離す」とある如きは、前の四種方便に當つれば施造方便に當るものであらうが、眞實法の上に於ける佛の御化益を談られたものである。二種法身の中の方便法身の方便もまたそうである。ところが今の方便化身土と云ひ、方便教義と云ふ方便はそうではない。これは眞實に對して眞實にあらざるものである。

である。今は前五卷を眞實と呼ぶに對して、第六卷を方便と稱したのである。『眞佛土卷』三十には「然るに願海に就て眞あり假あり、是を以て復佛土に就て眞あり假あり（中略）良に假の佛土の業因干差なれば土復干差なるべし、是を方便化身土となづく、眞假を知らざるに由て、如來廣大の恩徳を迷失す」とある。故に方便は眞に對した假である。假は權假である。權假は直に眞實に入ること能はざる者を誘引する爲に權りに設けた法門である。四種方便の中では權巧方便に當る、方は方則であり、便は便宜である。衆生を誘引するに方則あり、又其宜しきに隨つて引入するのであるから方便と云ふのである。

かやうに方便は眞實にあらざる誘引の法であるから、これを階梯と云ひ暫用還廢と云ふ。階梯は上階に登る梯子である。梯子は上階に登る爲には必要なものであるが、登り已れば捨てねばならぬものである。永く梯子に止まるべきものではない。暫用還廢と云ふのが此意味である。暫く用いて、還て廢するのである。根機が未熟にして眞實の法を受くるに堪へない者の爲に、暫く權假の法を用ひて調へ熟さしめ、還てそれを廢して眞實の法を與へるのである。方便法は此の如く取扱はるゝものであるから、眞實法に對すると、それに入らしむる手段に過ぎないものであつて、劣つたものであると云ふ貶抑の意味も存して居る。それで今この化身土卷に示された方便は、眞實に入らしむる爲に設けられた眞實にあらざる法門であると云ふ意味である。

第二、化土の説明

一 報土と化土

要門、眞門の行者が感見する化身土とは如何なるものであるか、それは眞實の身土の上に化現した、一段下つた身土であつて、『觀無量壽經』に説かれた佛及び淨土がそれであると云ふことは、一往先きに述べた如くであるが、それが如何なるものであるかと云ふことを説明して置きたい。

阿彌陀佛の身土が報身報土であることは、淨土門に傳承された定説である。聖道門諸師の彌陀身土觀と異なる要點の一つである、故に善導は『玄義分』に四十八願酬因の身なることを論じ、宗祖は『眞佛土卷』に「大悲の誓願に酬報するが故に、眞の報佛土と曰ふなり」と云はれてある、此の報土に凡夫が往生することのできると云ふことは、善導大師一代の主張であり、法然上人淨土開宗の所由であつて、宗祖の明らかにせられんとしたところである。故に報身報土であると云ふことは、淨土門に於ては大切なことであるが、大體報身報土と云ふことは、佛身佛土を法、報、化の三身、又は法、報、應、化の四身に分つた中の一つであつて、因位の願行に報はれた佛身佛土であるから、法身が其所證の理體に就て云ひ、應身、化身が衆生化益の爲に衆生に應じて現じたものであるのと異つて佛果の本體と云ふべきである。宗祖は此の報身報土に於て眞報佛土と、化身土との二つを分けられた、眞報佛土は光明無量、壽命無量を正覺の體とし、廣略相入の妙境界である、涅槃の妙理のそのまゝが顯はれ、そのまゝ涅槃の妙理に契へる光明無量、壽命無量の佛であり、三嚴二十九種と數へらるゝ微妙莊嚴相のある世界であつて、佛は十方衆生を信ぜしめ證らしめ給ふ攝化の大用ましく、淨土は一たび入る者は悉く涅槃の妙果を證せしめてたまふのである、故に佛も土も無相の妙理の上に現じた事相であるから、妙莊嚴相のあるまゝ固定した相狀があり數量がある譯でなく、相即無相、無相即相、數即無數、無數即數と云ふ不可思議の妙境界である。故に此土に入る者は一人として涅槃の妙果を證しないものはない、これが廣略相入である。

廣門の事相では國土と佛と聖衆と分れて、それ〴〵莊嚴相があるが、略門ではいづれも法性涅槃の妙理に契はざるものはない、これを廣、略に入り、略、廣に入り、廣略相入する妙境界と云ふのである。故に吾人も一たび淨土に往生すれば、佛と同じ涅槃の妙果を證するのである、ところが化身土はそうでない、眞報佛土に入ることのできない者の爲に化現された佛土である。入ることのできないと云ふのは他力の信心を獲得することのできない者である、この者は如來の同向を領得することができないから、佛の證りに契ひ、淨土の眞相に達することができない、故に其者が往生し、其者が感見することのできるやうに化現されたこれが化身土である。尤も化現されたと云つても、三身、四身の中の應身、化身とは違ふ、阿彌陀佛にもそれはある『鼓音聲經』に説かれてある

清泰國の阿彌陀佛の如き、親があり子がある如きは釋尊と同じやうな應身佛であらうが、今の化身土はそれと異つて、一般的に云へば報身に屬するものである。其中に佛自らの證のまゝの現はされてある眞報佛土と、それを見ることのできぬ者の爲に自證を覆ふて其上に現出された化身土とがあるのである。所が兩者共に因願に酬ふてできたものである、故に『眞佛土卷』^{三十}一丁には「眞假皆是れ大悲の願海に酬報せり」と云はれてある。眞報佛土は其正覺の體たる光明、壽命の徳より云へば十二、十三の兩願に酬ふたものであり、衆生救濟の根本の誓願から云へば第十八願に酬ふたものである、これが佛の本體である、其上に化現された佛と土とが化身土であるが、此化現さるゝと云ふことが、十九願、二十願の方便願に酬ふたのであるから報身報土である。故に普通の化身化土とは別であるから、普通の化身化土を通化と云ひ、今の化身化土を別化と云ふ人もあり、又報中の化であるから報化とも云はれてある。

二 化土の相狀

此化身土の有様は如何なるものであるかと云ふに、宗祖は『觀經』眞身觀の佛がそれであり、觀經の淨土がそれであるとしてあるから、『觀經』第九觀に説かれた阿彌陀如來が化身であつて、其相狀は我々が想像することのできない程の尊い佛であり、又定善十三觀には所觀の對境として淨土の相狀が説かれ、散善九品には往生人の

生るゝ所の世界として九品淨土の有様が説かれてあるから、それが指されて化土としてあつて、其相狀は美しいことまた言語に絶したものであらう。ところがそれがどうして劣つた化身化土であるかと云ふに、これに就いて

『教行信證大意』に眞身觀の佛を、化身と判ずる所以を論じて

これをもて化身と判ぜられたる、常途の教相にあらず、これをこゝろうるに觀經の十三觀は定散二善のなかの定善なり、かの定善のなかにとくところの眞身觀なるがゆへに、かれは觀門の所見につきてあかすところの身なるがゆへに、弘願に乘じ佛智を信ずる機の感見すべき身に對するとき、かの身はなを方便の身なるべし、すなはち六十萬億の身量をさして分限をあかせる、眞實の身にあらざる義をあらはせり、これによりて聖人この身を以て化身と判じたまへるなり。

とある。これによると要門定善觀門の所見であるからと云ふことゝ、六十萬億の數量があるからと云ふことである。そうすると化身化土の相狀の特色は數量が限定して居ると云ふことである。數量の限定と云ふことは或一相に固定して居ると云ふことである。其一相に固定するのは固定せざるを得ないのであつて、それはそれを感じする定つた原因があるからである。十の物を見るだけの原因ある者は十だけしか見ることができない。二十の物を見るだけの原因ある者は二十だけしか見ることができない、其原因に限らるゝと云ふことは佛の不可思議の他力をたのみならずして、衆生の限定された力をあてにした自力の作善によるからである。そこで人々各々限定した身土

を見る、これが九品淨土である。其修因に九品の別があるから、生れた淨土にも九品の階級がある、『眞佛土卷』三十に「良に假の佛土の業因千差なれば土復た千差なるべし、是を方便化身化土と名く」と云はれてゐるのは其意味である。故に數が各々限定して數即無數でなく、隨つて一相にとゞまつて相即無相でない、故に廣略相入でない。廣門の或る一相は通ずるものがあつても、相入して居ないから、本質が異なる世界である。

今『化土卷』には化土の相狀を示すものとして『大經』の道場樹や講堂の莊嚴相を示す文、『大經』『如來會』の胎生化生によつて信疑の得失を判する文、『往生要集』によつて『菩薩處胎經』の懈慢界の説などが擧げられてあり、又化土を呼ぶ名稱としては懈慢界、疑城胎宮が擧げられてあり、『愚禿鈔』上には「彌陀の化土に就て二種有り、一には疑城胎宮、二には懈慢邊地」と云はれてゐる、また『大經』の道場樹と講堂とに就いて『和讚』には

七寶講堂道場樹

方便化身の淨土なり

十方來生きはもなし

講堂道場禮すべし

と云はれてあり、『三經往生文類』にも道場樹の文は擧げられてゐるが、これは道場樹の經説は高さ四百萬里、周圍五十由旬、枝葉が四方に布くこと二十萬里と云ふ如き數量が限定されてあり、又此樹を見るによつて得る利益が一には音響忍、二には柔順忍、三には無生法忍と云ふ如き、次第に進む狀態に説かれてあり、又道場樹の因願である第二十八願に少功德の者も、これを見ることができると願じてゐるなどの點から化土の相と見られたものであらう。

講堂はこれを連説されてある寶池に十由旬、二十三十乃至百千由旬と云ふ數量が限定されてあり、また講堂、精舍、宮殿、樓觀と並べられてある宮殿は胎生の者の處する宮殿と相應するからであらう。

胎生は淨土に往生するも蓮華尙ほ開かず、華に含まれて、恰も母胎中に處する如くであるから胎生と云ふ、これは佛智を疑惑して信ぜざる者が善本を修して往生した狀態である。蓮華尙ほ開かないから、佛を見ることも、法を聞くことも聖衆を見ることもできない、故にこれを不見三寶とか含華未出とか云はれてゐる、これも即ち化土の相狀である。但し華中に含まれてゐるとは云へ、それは宮殿の中にあるもので、「處する所の宮殿は或は百由旬、或は五百由旬なり、各々其中に於て諸の快樂を受く」とも説かれ、或は「彼の國に生ると雖、蓮華の中に於て出現することを得ず、彼等の衆生華胎の中に處して、猶し園苑宮殿の想の如し」とも説かれてゐる、所がこれに就いて、觀經九品の淨土はそれ〴〵華に含まるゝと云ふことはあるが、それは遲速はあるが、孰れも華は開けて三寶を見、十方世界に至つて諸佛を供養することさへ出来るが、これは化土でないであらうか、化土であつても胎生でないものがあるのだらうかと云ふに、これには種々な説があつて、あの九品淨土は化土であるから、あのまゝが胎生含華である、故に含華は二重になつてゐる、『觀經』の含華の上に『大經』の胎生含華があるの

であると考へ、或は含華が二重にあるのではない、『觀經』の華開已後の相狀は實は華内の果報の不同を華外に持ち出して示したものであるとし、或は華の開けるには深自悔責と云つて、自ら疑惑佛智の罪を悔ひて、佛智を信じたによるものと、時劫が満ちたからのものとがある、前者は『大經』に説かれてあつて其開華は眞土に入り、後者は『觀經』に説かれてあつて其開華は尙ほ化土に留まるものであるとする、此の説によると化土には時劫の満ちたことによる開華の者のあることとなる、いづれにするも九品淨土は化土であり、胎生も化土である、故に孰れも眞實の佛、法、僧の三寶を見ざることに於ては同一である。

懈慢界は西方此を去ること十二億那由他の處に存在する國土であると説かれてある、故に古來極樂の邊地とか胎生とかと同異が考へられてあるが、宗義では同じ化土のこととしてある、極樂の距離十萬億土と異つて其途中にありとするのは、報土でないから報土と同一に説かざるまでであらうと考へられてある。

已上によつて化身化土の相狀は大體に想像されるであらう、苦はない樂はある、けれども固定した相を見、限定した數量に止まり、眞實の三寶を見ることはできず、華に含まれて居る不自由なものである、『大經』には轉輪王の王子が罪を犯し、七寶の宮室に飲食、衣服、妓樂等の充分なる給與はあるが、金鎖を以て繋がれて居るやうなものであるとしてある。即ち眞實の報土に於ける自由に背いて居るまことに氣の毒な人である、此不自由な化土を離るゝのは上に云へる如く、其本罪である佛智疑惑を知らしめられ、これを悔い、佛智を信ぜしめらるゝ

ことに於てある、彌陀の淨土に向つては唯信することのみ、其眞實に契ふ道である。

三、化土の名稱

化土の名稱は疑城、胎宮、懈慢、邊地と云はれてある、疑城の名は『平等覺經』や『大阿彌陀經』の意によられたものであつて、疑惑の因よりして招く結果の城であるから疑城と云ふ、これは因より果に名づけたものである。胎宮は上に擧げた『大經』や『如來會』の意に依られたものであつて、華胎の宮殿であるから胎宮と云ふ、これは直ちに果相に就て名づけられたものである、懈慢は『菩薩處胎教』の説に依られたものであつて、懈怠憍慢の人の生るゝ世界であるから懈慢界と云ふのである、懈怠憍慢と云ふのは憍慢は我機の淺ましさが知れないのであり、懈怠は法の尊さを聞かないのである、故に淺ましい者が、尊い佛の願力に救はるゝと云ふ二種深信の立たない者である。此者の生るゝ世界と云ふのであるからまた因より果に名づけたものである。邊地は『大經』に其名が見えて居る。三寶を見ざるが如きは邊地に居る者と云はねばならぬ。これはまた直ちに果相より名づけられたものである。これ等はいづれも化土の名であるが、『愚禿鈔』に疑城胎宮を一つとし、懈慢邊地を一つとしてあり『末燈鈔』第二章にもそうしてあつて「第十九第二十の願の御あはれみにて」としてあるのは、其義の親しいによつて、眞門と要門との所生の土を分たれたものであらう、それは眞門は名號に手をかけ念佛し

ながら疑によつて眞實を見ないのであるから、其者の生るゝ世界は疑城と云ひ胎宮とあるのが親しく、要門の諸行に滞つて名號を知らざるものは、尙ほ極樂に達せざる懈慢界又は邊地と云ふのが親しいからである、併し實はいづれの名も通するのであるから限るべきでないのであらう。

第三 要門の教義

一十九 願意

要門教義は淨土往生の爲に自力で念佛已外の善根功德を修し、これを回向し、臨終に佛の來迎を得て、方便化土に往生するのである、これは阿彌陀如來が四十八願中第十九の願に誓はれ、釋尊が『觀無量壽經』に廣く開説された教法である。十九願には

設我得佛十方衆生、發菩提心、修諸功德、至心發願、欲生我國、臨壽終時、假令不與大衆圍繞、
現其人前者、不取正覺、

と誓はれてある、これは修する所の行は菩提心であり、諸の功德であるから聖道教で教へられてある、あらゆる善根功德である、これに伴ふ安心は心を至すと云ふ眞劍さを持つて修行し、而もそれは淨土へと發願して修するものであつて、隨つて其修した功德はこれを以て淨土に往生しやうと回向するのである、此修行と、此安心とがある、と臨終に當つて阿彌陀佛は諸の菩薩などの眷屬と共に來迎せられて淨土へ往生するのである、故にこれを第十八願と比較すると其因も其果も大に異なる、十八願の行は念佛であるが、今は修諸功德であり、十八願の安心

は信樂の心を中心とするが、今は發願の心を主としてある、又行と安心とに於ては十八願は安心を先づ擧げて主とすることを示してあるが、今は行を先づ擧げてこれを主としてある、其果に於ては十八願は往生が直に示されてあるが、今は來迎があげられてある、かくの如く因果共に別であるから、十八願の法義と十九願の法義とは同列にあるべきものでなくて、十八願が眞實であれば十九願は方便であり、十八願が佛の本意であれば十九願は本意でない隨他意の願でなくてはならぬこととなる、『化卷』にこれを此の願の名稱に顯はして、此の願をば

修諸功德之願

臨終現前之願

現前導生之願

來迎引接之願

至心發願之願

と名づけてある、此の願名中、初と後とは宗祖が特に名づけられたものであつて、初は行が修諸功德であること後は安心が發願を主とすること、中間の三名はいづれも來迎の意味である、十八願と異つた因果であることを顯はされてある。これは淨土異流に於て、或は十九願は來迎の利益を願じられたものであつて、修諸功德は其所由、これは念佛と諸行とに通ずるものであるとし（真西派の意）、或は十八願の能念の念佛に對して、所念の來迎の佛

體を示したものであり、發菩提心修諸功德はこれを修しつゝある者と云ふ意であつて念佛の根機を示したものであるとする（西山派の意）如きとは其意が全く別である。

二 觀經の開説

彌陀が十九願に誓はれた意を承けて、釋尊がそれを廣く展開して示されたものが『觀經』であると宗祖は見られた、『化卷』の標擧の至心發願之願の註に「無量壽佛觀經之意也」と示し、同二丁左には『觀經』定散九品の文を十九願の成就を説けるものとし、同六丁左には『觀經』顯説に定散の諸善を顯はし、三輩の三心を開くとしてあるのは皆これである、これを『大經讀』には

臨終現前の願により 釋迦は諸善をことごとく

觀經一部にあらはして 定散諸機をすゝめけり

と示されてある、『觀經』は支那已來多くもてはやされた經典であつて、其註釋書も多い、隨つて見方もいろいろあるが、説かれてあることは、韋提希夫人に對して西方往生の行として定善十三觀の觀察行と、散善三福の行を九品の往生人の上に示されたものと、つまり定散二善が示されてある。ところがそこには念佛はないかと云へば定善の中にも第九觀には「念佛衆生攝取不捨」と云ふ光明の作用が示されてあり、散善九品の中には下三品の惡

人が念佛で救はるゝことが説かれてあり、殊に流通に至つては念佛の功德の最も勝れたことを述べ、而も其念佛が付屬されてある、これを若し定散二善で説かれてある邊から云へば第十八願の教義とは異つて第十九願の修諸功德の状態であり、念佛で悪人が救はれ、念佛のみ付屬さるゝ邊から云へば第十八願の教義のやうである。そこで善導大師は此經に要門、弘願の二門のあることを云ひ、宗祖は隱顯二義があると見られた、即ち顯説の表には要門教義が示され、隱意の裏には弘願教義が秘められてある、而も其要門教義は廢せられて弘願教義が立せらるるのである、要門教義は弘願教義の獨り秀でたものであることを知らしむる手段として用ひられたものであることが知らるゝ、第十九願の要門教義は『觀經』に來つてかくの如く廣く示されて、弘願を顯はし、弘願に誘引すべき作用がなさしめられてある。これが釋尊が彌陀の願意を受けて顯彰された教義でありて、これを釋尊の觀經開説と云ふのである。

三 要門施設の所由

彌陀は十九願を誓ひ、釋尊は『觀經』一部に開設して、要門教義を設けらるゝのは何の爲であるかと云ふに、『化卷』一丁に

然るに濁世の群萌、穢惡の含識乃し九十五種の邪道を出で、半滿權實の法門に入ると雖、眞なる者は甚以

て難く、實なる者は甚以て希なり、僞なる者は甚以て多く、虚なる者は甚以て溢し、是を以て釋迦牟尼佛彌陀藏を顯説して群生海を誘引し、阿彌陀如來は本と誓願を發して普く諸有海を化したまふ

と、其所由が示されてある。これは濁世の群萌、穢惡の含識とは吾々凡夫のことであつて、それが九十五種の外道の教法を離れて佛教に歸し、或は小乘、或は大乗、或は權教、或は實教の聖道教を學ぶも濁世であり穢惡であるからして眞實なることは至難であり、虚僞なることは多い。故に畢竟淨土眞實の教たる本願他力に歸するより外眞實たり得る道はないのであるが、其根機は尙ほ未熟にして、直にそれに歸し得ない、爲に其機を誘引せんとして釋迦は『觀經』を説き、彌陀は本十九願を立てられて、要門法を興へられたと云ふのである。即ち聖道門の修行が至難である爲に、方向を轉じて淨土へ往生せんとするも、尙ほ自力の心強きが故に、暫くそれに應じて、自力修善の此の要門法を興へて其機を調熟し、遂にこれを他力眞實の教に轉入せしめんとせられたものである。故に要門法の設けられた所由は、外聖道の根機を誘引して、遂に弘願に入らしめんが爲である。所が今此要門法を福德藏と呼ばれてあるのは、藏は法門の意味であつて法門を指し、福德と云ふのは、弘願眞實の法を福智藏、方便眞門の法を功德藏と稱するに對した名稱であつて、弘願が福智二莊嚴圓具し、眞門が不可思議功德の名號によるに對し、要門は小善根福德因縁と呼ばるゝ定散諸行を修して往生せんとするものであつて、未だ佛智を信ぜざるものであるから智の字を興へず、福德と呼ばれたものである、己が善根福德をたのんで佛智をたのみ得

ざるものを稱するのである。又眞門と合せて方便藏とも稱する、これは方便誘引の法であるからである。己が力をたのむ自力心の根機には此法を興へて修せしめ、たとひ淨土往生を望むとも自力の行は成就し難い根機であるから他力をたのむ外なしと、遂に眞實他力の教に進轉せしめんとしたのである。

四 要門の因

此要門の教義は如何なる因により、如何なる果を得るものであるか。これが要門教義そのものゝ説明であるが其因には行と信即ち行業と安心とがある。其行業は十九願には上に述べた如く發菩提心と修諸功德とが擧げられてある、修諸功德と云へば諸の功德を修することであるから、善根功德と云はるゝものゝ一切である。發菩提心は佛果菩提を求むる心であつて佛道を修するに就ての最始のものであり、最終のものであつて最も肝要な功德であるから特に擧げられたものである。此十九願に擧げられた行業が『觀經』には定散二善三福九品として開説された。定散二善とは定善と散善とであつて、定善は慮を息め心を凝らして修する善根即ち定心の上に觀念を修するのである。『觀經』にはこれに十三觀の觀法を説かれた、十三觀は淨土の依正二報を觀察することである。散善は散亂心のまゝに惡を廢め善を修するのである、觀經にはこれを三福九品として説かれた、三福とは世戒行の三福である、世福とは世間の常道としてある善根であつて、孝養とか慈善とか云ふ如きものである。戒福とは佛

の定められた戒法即ち五戒、八戒、十戒、二百五十戒等の如きものである、行福とは大乘の自行化他の行法であつて發菩提心とか、大乘經典の讀誦とか行者を勸進するとか云ふ如き善根である、これを實際に修することを上より下下に至る九品に分つて示されてある、要するに定散二善であつて即ち一切諸善を收むるのである。

次に其安心は十九願ではまた上に述べたやうに至心發願欲生我國が示されてある、至心は心を至すと讀むも至れる心と讀むも、眞實の心であつて、今は行業を修するに名利の爲と云ふ如き虚偽の心でなく眞劍な心であるべきを云ふ、發願とは淨土へ往生せんとする願を起すことである、それが即ち欲生我國である。所が此發願の心には必ず回向の心があるべきである、淨土へ往生せんと發願して善根功德を修したならば、それを以て淨土へ往生しやうと回向すべきである。しかし今の願文にはそれが擧げてない、二十願には發願なくして回向が擧げてある、これは二十願と其特色とすべきものを分別して擧げられたものである。此願では今まで西方淨土へ向はなかつたものが發願したのに、此願の安心の特色があり、二十願は自己の善根として回向すべからざる念佛を回向するところに其安心の特色があるからである。故に實は兩者共に發願、回向はあるべきものである、又この安心には安心として最も肝要なるべき信がない、これは要門には要門だけの信はあるべきであるが、十八願の眞實の信心に望めて見れば、要するに疑惑に屬するものであるから、今省かれたのである。安心はかくの如くであるから『觀經』の開説には至誠心、深心、回向發願心の三心としてある、この三心は若し隱意の裏面から云へば十八願の至

心、信樂、欲生我國の三信と同一であるが、顯説の表面は十九願の安心である、至誠心は至心と同、深心は深く信する心であつて修諸功德定散二善の因によつて往生を得ることのできる教理を信するのである、同向發願心は發願欲生我國の心である。

『化卷』には此等の意味を詳しく示して要門には正助雜の三行ありとしてある(本十五丁)これは善導が淨土の行業を分別して雜行、正行となし、其正行を正定業、助業と分ちたのに依られたのである。其雜行とは『般若經』を讀誦するとか、大日如來を禮拜すると云ふ如き彌陀に直接關係しない行業を以て淨土へ往生せんとするのを云ふのである。これは其行本來の目的と西方淨土の往生と云ふ目的が雜通したり、又其行が雜多であると云ふことから雜行と云はるのである。正行とは彌陀に關する讀誦、觀察、禮拜、稱名、讚歎供養の五正行であるが、其中稱名は最も主要であるから正定業であり、他はそれを助くる意味のものであるから助業である。この正助二業は正定業の稱名が名號のお力一つをたのむ他力のものであれば眞實の行業であるが、自力に止まつてあるからには要門か眞門かである、故に要門にも正助雜がある、此三行に就て『化卷』本十七丁已下に要門の行業安心を詳しく示され、先づ雜行に專行と雜行とがある、專行とは一善のみを專修するのである、雜行とは諸善を兼行するのである、そうしてそれに專心と雜心とがある、專心とは同向を専らにするのである、即ち他に向ふことなく専ら西方淨土に向つて同向するのである、雜心とは定散の心が雜はるのである、定散の心が雜はると云ふのは自己

の定心を選び、散心を働かすのであつて、つまり自力を働かす心を云ふのである。專行であつても雜行であつてこれ等の心はあつて、一面は專心であることは宜しいが、一面雜心であることは宜しくないことである。そこで其行と其心とを合はすと雜行雜心、雜行專心、專行雜心、專行專心があることとなる。

次に正助二行に就て專修雜修がある、專修に稱名のみ、と讀誦等の五正行のどれかを一つ當て修する五專と云はるゝものがある。雜修と云ふのは助業と正業とを兼行するものである、其助正兼行には助業と正業とを全く分別せずして兼行するものと、助と正とは分別するが助の力を以て正の力を補ひ助正合せて往因を成じやうとする者となる。要するに專修と云はるゝものにも雜修と云はるゝものにも程度の差では種々なものがあるであらう。そうしてこれにまた專心と雜心とがある、專心とは定心の場合でも散心の場合でも何れも正行を専らにするものであるから與へて專心と云ひ、それがまた定散心を運ぶ自力心であるから雜心と云ふ、そこでまた其行と心と組み合はすと專修專心、專修雜心、雜修雜心、雜修專心があることとなる、蓋し要門の修因は自力の行信であるから諸機各別であつて千差萬別である、此状態を『化土卷』には緻密に分別をして顯はされてある、宗祖が眞實の教義に於て萬機を極惡の一機とし、他力信心の一因によりて滅度の一果を證得すると云ふ、最も簡明な様式を顯はされてあるが、其反面には自力を雜ふる者の複雑なる状態が、かくの如く微細に考へられてあつたのである。

五 要門の果

要門の行者が上の如き安心行業を因として得る所の果は臨終に佛菩薩等の來迎を得、其力を加へらるゝことによつて淨土へ往生するのである、十九願に「假令不與大衆圍遶現其人前」とあるのは此來迎を示されたのである。所が其來迎も其往生も修因の勝劣によつて勝劣がある、これを『觀經』の九品に詳説されてある、宗祖が『眞佛土卷』に「假の佛土の業因千差なれば土復千差なるべし」と云はれたのはこれである、其淨土は即ち化土であつて、此處で長時永劫修行して後に眞土に轉するのである、そうして此要門に於て來迎が特に云はるゝに就て宗祖は『末燈鈔』丁に

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに、臨終といふことは諸行往生のひとにいふべし、いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり(中略)眞實信心の行人は攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す、このゆへに臨終まつことなし來迎たのむことなし、信心のさだまるとき往生またさだまるなり

と示されてある。諸行の往生は自力であるから、其成就は臨終まで定められない、故に臨終に來迎をまつて往生を定めやうとするのである、故に來迎に特に意義があるから、十九願諸行往生に於て擧げられた譯である。

六 邪定聚の機

宗祖は要門の人を邪定聚の機と呼ばれてあることは上に述べた通りであるが、これは『大經』に「邪聚」とあり、異譯の『如來會』に「邪定聚」とある語に出でたものであるが、これは弘願の人を正定聚、眞門の人を不定聚と云ふに對した名稱であつて、邪定と云ふのは機も法も邪に定まつた類と云ふことである、これは彌陀の淨土に往生すると云ふことに於て正しい者は、御名に救はることを信するのであるから、法は御名であり、機は他力の信である、然るに要門の機は御名の力を仰ぎ得ずして、諸行を修する、他力の信であり得ずして、自力定散の心である、故に機も法も共に正しからざるものである、これが邪定聚たる所以である、この名稱は吾人が如何にあるべきであるか、また如何にあるべからざるかを簡明卒直に指示されたものである、吾人は邪定の聚を離れて正定の聚たらねばならないのである。

七 雙樹林下往生

宗祖はまた要門の往生を雙樹林下往生と呼ばれた、これは弘願の往生を難思議往生、眞門の往生を難思往生と云ふに對した名稱であつて、もと善導の『法事讚』上に見へて居る、雙樹林下は沙羅雙樹の林の下であつて釋尊

入滅の場所である、これは要門の往生は化土である、化土に於ては上に述ぶるが如く其佛は眞佛の自體でなくして、衆生の感見に應じて化現された化佛である、故に衆生の機根に應じて入滅の相を現じられる、そこで雙樹林下に釋尊の入滅を見るが如く、佛の入滅を見る化土の往生であるから、此名稱を以て貶斥されたのである、これもまた吾人をして雙樹林下往生にとゞまる要門の法に停滯すべきでない、難思議往生の弘願眞實の法に進むべきことを明瞭に指示されたものである。

第四 眞門の教義

一 二十願意

眞門の教義は自力で念佛の行を勵み、其功德を淨土に回向し、また臨終に佛の來迎を得て方便化土に往生するのである、これは要門教義を受けた者が一轉して、諸行を捨て、念佛の行を用ひるも、尚ほ自力の心を捨て得ざる状態にあるものを云ふのである、これはもと阿彌陀如來が二十願に誓はれ、釋尊が『阿彌陀經』に開説された教法である。其二十願には

設我得佛十方衆生聞我名號係念我國植諸德本至心廻向欲生我國不果遂者不取正覺

とある、聞我名號係念我國植諸德本とは佛の名號を聞いて、念を佛の御國へ係け、佛の御名を稱ふることである。植諸德本は『大經』下卷に「修習善本」とあるのと同じことで、御名を聞いた上の徳本であり善本であるから、これは南無阿彌陀佛の名號のことであつて、これを善本徳本と云ふ、これを植ゑると云ひ、修すると云ふのは稱ふることである、これが眞門の行業である。故に行は稱名一行である。至心回向欲生我國と云ふは、其稱名を修するに眞劍な心持ちであるのを至心と云ひ、其功德を淨土へふりむけるを回向と云ひ、以て淨土へ往生せんとす

るのが欲生我國である、これが眞門の安心である。所が稱名行はもと他力をたのんだ相であつて、善根功德と考ふべきものでない、故に回向すべきものでない、所が今はこれを回向するところに方便眞門たるべき特色がある故に特に回向が用ひられてある、其回向のところには發願は無論存在する、またそこには其當分の信はあるべきであるが、十八願に對すれば疑惑行者であつて信を缺くから信は云はれてない、これが眞門の安心である。此行と此心によりて得る所の果が果遂である、果遂とは今の場合は淨土へ往生することを果し遂ぐるのである。併し此願の本意としては十八願の眞實へ轉向せしむることにある。故に果遂の意味が自らそれを意味することゝなるのである。これは、往生は十八願に限りて、今は直に往生と云はずして、果遂の文字を用ひられてある所には自ら其意味があると見ねばならぬ。故に此願に示すところの因も果も共に十八願と異り、十九願とも亦異なるから十八願の眞實教義でなくて方便であり、また十九願の要門教義でないから眞門の教義であつて、方便眞門が誓はれた二十願と見ねばならぬ。故に『化卷』本二十一丁には此願の名稱を列ねて

植諸徳本之願

係念定生之願

不果遂者之願

至心回向之願

とある。此願名中また始と終とが宗祖獨特の名稱であつて、始が行、終が心であり、中の二名は往生ができ果遂することを示されたものである。此の願名の上にも自力稱名の行を回向して淨土へ生るゝこと、又眞實へ轉向することの意味が充分顯はされてある。此の見方は念佛や諸行によつて結縁された者は成るべく早く往生せしめんと願であると見(鎮西派の意)或は上の十七、十八、十九の三願の所誓を果遂することを更に誓ふたものと見る(西山派の意)のと其意が異なる。

二 彌陀經の開説

二十願の意は釋尊によつて『阿彌陀經』に開説されてあると『化卷』には見られてある、『化卷』卷頭の「至心回向之願」に註して「阿彌陀經之意也」とし、十九丁已下に『觀經』に准知するに『阿彌陀經』にも隱顯ありとし其顯説は「善本徳本の眞門を開示し、自利の一心を勵ます」としてあるのはこれである。これをまた『大經讚』には

果遂の願によりてこそ

釋迦は善本徳本を

彌陀經にあらはして

一乗の機をすゝめける

と示されてある。これは阿彌陀經に示さるゝところは「聞説阿彌陀佛一執持名號若一日(中略)若七日一心不亂」

と云ふ念佛によりて、佛の來迎を得て淨土へ往生するといふことであるが、其念佛は諸行を小善根であると廢して、勸めるところの念佛であり、又初めより眞實の淨土の莊嚴相を説いて、その土への往生の因であるとする念佛であり、又諸佛はこれを證誠し、又それは不可思議功德と稱せられてある。かやうな點から見れば眞實の教法であるやうであるが、更に考へると少善根を廢して多善根をすゝめると云ふ多少相對の念佛であり、又其念佛は一日乃至七日と多きへ進むものであり、又一心不亂と心を勵ますやうに見え、又それに對して來迎あるやうに見へて居るなど、どうも『大經』の説とはどこか違つて、純眞な他力でないやうである。しかしそこでは、はつきり分り兼ねるがこれを『觀經』に隱顯あるに准じて見、殊に觀經下品の念佛に隱顯あることに准じて見ると稱名念佛しながら不純なものがあると云ふことが知れるから、念佛一行のみの説いてある此經の説にも亦た隱顯があるのであらうと知らるゝ、かくして此經の隱意は弘願眞實の教義であるが、顯説は念佛一行となりながら、尙ほ自力心の存在するものを説いて居ると云ふことが明らかとなるのである。これが二十願の植諸徳本であり、至心回向欲生我國である。即ち自力念佛である。行者は要門を出で、未だ弘願に入り得ざる中間に於て、要門の諸行を捨て、念佛に入るも、要門の時に深く薰じつけた自力心捨て難く念佛行にそれを加へ、淨土に回向して往生しやうとする、これが眞門であつて、『大經』の説と異なる感じは顯説にそれが示されて居るところにあるのである。

三 眞門施設の所由

二十願に誓はれ、彌陀經に説かれて此眞門の法義の設けられたの爲であるか、これを『化卷』本二十一丁には先づ要門の行信を擧げて善本徳本の名號を自力心を以て稱念する、教頓根漸のものであるとして、それを承けて

然れば則ち釋迦牟尼佛は功德藏を開演して十方濁世を勸化したまふ、阿彌陀如來は本と果遂の誓を發して諸有の群生海を悲引したまへり

と示されてある、これは要門の行者、一轉して名號を稱念するも、それに功を認むる自力心を以てする故に要門を出で、尙ほ未だ眞實に入り得ざるものである。此機を誘引する爲に此眞門があつた。眞門は教頓根漸である。教は名號であるから頓速に往生成佛すべき法なるも、機は自力であるからそうでない、故に漸と云ふのである。即ち要弘二門の中間状態である。これによつて根機を調へ、遂に弘願に轉入せしめんとせられたのである。故に『化卷』本三十一丁には宗祖は自己入信の歷程として、聖道より要門に入り要門より眞門に移り、遂に弘願に轉入したと三願轉入を示して、これを果遂の願功であると、要眞二門の誘引の作用を讃歎されてある、此の法を功德藏と稱せられたのは弘願の福智藏、要門の福德藏に對した名であつて、不可思議功德と云はるゝ名號を稱念する

ものであるから功德と云ひ、尙ほ自力に止りて、他力信心の智慧を得ないから智の名稱を許さないのである。又要門と合せて、共に方便誘引の法であるから方便藏と稱する。

四 眞門の因

眞門の因にもまた行信がある、行は稱名念佛であり、信は自力回向の心である。これは上に於てすでに二十願に誓はれ、阿彌陀經に開説されたことを述べた如くであるが、化巻本二十一丁には此の意を詳かにして、行業をば「善本あり徳本あり」と云ひ、それを解釋して「善本とは如來の嘉名なり、此の嘉名は萬善圓備せり、一切善法の本なり、故に善本と曰ふなり、徳本とは如來の徳號なり、此の徳號は一聲稱念するに至徳成滿し、衆禍皆轉ず、十方三世の徳號の本なり故に徳本と曰ふなり」としてある。これは南無阿彌陀佛の名號は萬善が圓備し、至徳が具足し、善法の根本であり、徳號の根本であるから、善本、徳本と稱するのである。但し名號を稱念することは弘願眞實の行も同じであるが、其信を異にする、信を異にするから行の意味が全く異なるのである。弘願眞實の稱名は本願名號の力に救はるゝことを仰いで、報恩感謝の心を以て稱ふるの功であり、今は稱へた功を認め、それを回向して往生しやうと求むるのである。二十願の至心回向欲生である。それを今は定専心、散専心、定散雜心と云はれてある。其雜心を説明しては

雜心とは大小凡聖一切善惡、各助正間雜の心を以て名號を稱念す、良に教は頓にして根は漸機なり、行は專にして心は間雜す、故に雜心と曰ふなり

と云ひ、其専心を説明しては

定散の専心とは罪福を信する心を以て、本願力を願求す、是を自力の専心と名づくるなり

と云はれてある、これは善本徳本の名號を稱念する、其心は定心であるか散心であるかであるが、其自己の定散の心を運ぶ自力心であるから定散雜心と云ふ。これは要門の心であつて、今は行は名號を稱念するのであるが、心は要門のそのまゝであることを示されたものである。この心で名號を稱念するときはこれを正定業として功を認むることは云ふまでもなく、餘の助業にも正定業を助けて功を増大せしむる力を認むるものであるから助正間雜の心と云はるのである。そこで教頓根漸とか行専心雜とか云はるのである。又此の心はそれが定心であつても散心であつても、共に罪福を信するの心即ち罪を恐れ福をたのむ心である。これは善惡因果の理を信ずると似たやうなことではあるが、別であつて、他力救濟の本願の前に立つて尙ほ罪を恐れたり、福をたのんだりすることは、他力が尙ほ信ぜられず、自力に滯る心であることを云ふ。其自力心で、名號を稱念した自己の功を以て本願力に救はれやうと求むる、それが本願力を願求するのである。畢竟、行専心雜のことであるが、専ら本願力を願求する邊から専心と云ふのである。故に行は名號を稱念することであり、信は自力の心を運んで其修した功を

認めて回向することである、これが眞門の因である。

五 眞門の果

要門の果と程度の差はあらうが、大體に同一であつて、また臨終に來迎を待ちうけて、其加力によりて淨土へ往生する。故に『阿彌陀經』には其來迎のことが「阿彌陀佛與諸聖衆現_ニ在其前_一」と説かれてある。そうして淨土へ往生するのである。其淨土は云ふまでもなく化土である、二十願の果遂は當分ではこの往生のことを意味するのである。

六 不定聚の機

この眞門の人は不定聚の機と呼ばれてゐることは最初に述べた如くである。此名稱は弘願の正定聚、要門の邪定聚に對した名稱であつて、『大經』や『如來會』に不定聚とあるに出でたものである。不定聚と云はるゝは眞門の人は教頓根漸、行專心雜であつて、行は稱名念佛のみであるから正しい、信は定散自力の心であるから正しくない、故に正しいに定まらず、正しからざるに定まらざる類であるから不定聚と云はれたのである。即ち要門を出て弘願に達せざる中間状態なることを顯はされた名稱である。

七 難思往生

眞門の往生が難思往生と呼ばれてゐることは前に述べた如くであるが、これはまた弘願の往生を難思議往生と云ひ、要門のそれを雙樹林下往生と云ふに對した名稱であつて、其意味は宗祖自ら『三經往生文類』にお示し下されてある。曰く、

定散自力の行人は不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號をおのれが善根としてみづから淨土に回向して果遂のちかひをたのみ、不可思議の名號を稱念しながら不可稱不可説不可思議の大悲の誓願をうたがふ、そのつみふかくおもくして七寶の牢獄にいましめられて、いのち五百歳のあひだ自在なることあたはず、三寶をみたてまつらず、つかへたてまつることなしと如來はときたまへり、しかれども如來の尊號を稱念するゆへに胎宮にとゞまる、德號によるがゆへに難思往生とまふすなり、不可思議の誓願を疑惑するつみによりて難思議往生とはまふさずとしるべきなり

と、難思と云ふは名號不可思議の德である、其名號を稱念した往生であるから要門の雙樹林下往生と別つて、褒めて難思往生と云ふ。しかし名號の全くの意味である他力の佛智に徹底することができずして、自力を運んで居るから、佛智を疑惑するものである。故に、弘願の難思議往生と異りて、貶して議の一字を省き難思議往生と云

はれないのであるとの説である。即ち褒貶二意を含んだ名稱とせられたのである、かくして以て次第に誘引して他力信心の妙處に至らしめやうとせられたものである。

第五 聖道の批判

一 聖道門

淨土門内に於ける方便教義たる要眞の二門に關する『化卷』の所説の一端を上述べたが、眞實の教義に於ては尙ほ簡ぶべきものがある、それは聖道門と外道とである。これは共に教界に於て人心を支配して居るものであるから、眞に眞實教に引入せんべんとするならば、それに對する適當な批判を以てせねばならぬ、これが『化卷』十本三三丁已下末卷に及んでの所説である。このことは已に『信卷』末六丁に、弘願眞實の行者を褒譽して眞佛弟子と稱せられてあるものを説明して「眞の言は偽に對し假に對するなり」とし、十二丁に其假をば「假と言ふは即ち是れ聖道の諸機、淨土の定散の機なり」と云ひ、其偽をば「偽と言ふは則ち六十二見九十五種の邪道是れなり」と云はれてある。こゝに一切の宗教を眞假偽と批判されたことが知れる。其假が要眞二門と聖道とであり、其偽が外道である、其假の聖道門を今批判されて、佛教の將來が如何にあるべきかを示唆されてある。聖道門に就ては、これより先き『行卷』四十四丁に於て本願一乘海の義を釋して「二乘三乘あることなし、一乘三乘は一乘に入らしめんとし、一乘は即ち第一義乘なり、唯是れ誓願一佛乘なり」と云ひ、『化卷』本十六丁、要門を

明かす下に一代教に就て聖淨二門を判釋し、安養淨刹に於て入聖證果する淨土門易行道に對して、聖道門難行道は此界に於て入聖得果するものとし、それに大小、漸頓、一乘二乘三乘、權實、顯密、堅出堅超がありて、これは自力利他教化地方便權門の道路としてある。これで聖道は此土で直に佛果を證しやうとする法門であつて、それには釋尊一代の八萬四千の教法を悉く收め、而も方便權門の道路とし、本願は一乘海であつて二乘三乘と相並ぶものではない、他は悉く本願一乘海に入る方便なりとしてある。このことは『和讚』にも、

聖道權假の方便に

衆生ひさしくとゞまりて

諸有に流轉の身とぞなる

悲願の一乘歸命せよ

と云はれてある、それを今は其時代の教法として、そうであるべきことを批判されて居るのである。

二三時の通塞

今の文の最初に曰く、

然るに正眞の教意に據て古徳の傳説を披く、聖道淨土の眞假を顯開して、邪偽異執の外教を教誡す、如來涅槃の時代を勘決して正像末法の旨際を開示す

とある、正眞の教意とは佛陀の眞説たる經典、古徳の傳説とは道緯、最澄其他の諸説である、それ等により聖淨

の眞假を分別し、外教の誤れるを教誡する。それに就て、聖淨の眞假は如來涅槃よりの年代を勘へ、正像末法の差異を明らかにして、これを定むると云ふのである。其正像末法を三時教と云ふ。此三時の年數には諸説があるが、今用ひられてあるところは佛滅五百年を正法、其後一千年を像法、其後一萬年を末法とする説である。これは『大集經』月藏分などに本づいたものである。其三時の差異はこの下に引用された『安樂集』の諸文、最澄の『末法燈明記』に經文によつて詳かに示してあるが、大體で云ふと正法とは正は證でありて、教あり、それによりて、行するの行あり、其行如實にして證果あるを云ふ。像法とは像は像似であつて、教あり行あつて正法に似るも、行完全ならずして證果なきを云ふ。末法は教あるも已に行證なきを云ふ、『末法燈明記』の文にも「末法の中に於ては但言教のみ有て行證無けむ」と云はれてある。かくの如く正法の時には其教によりて證果を開くことを得るから通ずるのであり、末法に至れば然らざるが故に塞がるのである、佛滅後の時代によりて此の如く教法に通塞があるとせられてある。ところがこれは聖道門の教に於て云ふことであつて、淨土教はそうでない、正法に像法にも無論其益あるが、末法に至つていよく教益を顯はす、即ち三時に通あつて塞がないのである。此下に『安樂集』の四文が引かれてあるが、著者道綽禪師は陳の文帝天嘉三年（西紀五六二）に生れ唐の貞觀十九年（同六四五）に八十四歳で寂せられた、其頃は佛滅は今『化卷』にあげられてある周の穆王五十三年（紀元前九四九）説が殆んど定説として行はれて居つたから、其誕生は佛滅一千五百十一年であつて、末法に入つて後十一年であり、

而も北周の武帝ぶていの破佛は其十三歳より十九歳に亘つてのことであり、道綽の出家は十四歳であつたから經説と目前の事實とよりして末法意識が一般にも自己にも強かつた、そこで其末法の時に當つては淨土教によるの外はないことを痛感して、それを勸發かたはつせんが爲の著述が『安樂集』であつた。故に此集に於ては聖道門、淨土門の教判を設けて、聖道門は佛を去ること遙遠であり、其教理は深く衆生の智解ちげは微劣みれつであるから、今や一人も證り得る者はない、此時代に於ては佛の本願に救濟さるゝ淨土の一門のみ通入する道であると云ふことを明瞭に分判された、これを時に約し、機に被らしめての廢立と云ふのである、今正しく此意を承けて示されたのである。聖道門は三時に通塞があり、淨土門は通あつて塞がない、時によつて通塞の異なるが如き法は眞實ではあり得ない、三時に衰變すいへんなく常に通ずる法こそ眞實である、而も今佛滅後幾何なるやを考へられて、

三時教じけうを按ずれば如來般涅槃の時代を勘ふるに、周の第五の主穆王五十一(三)年壬申に當れり、其壬申より我元仁元年(後堀川院諱茂仁聖代也)甲申に至つて二千一百八(七)十三歳なり

と云はれてある。されば已に末法に入りて六百七十三歳である、吾人は何を捨て、何に歸すべきか明瞭であると示され、而もそれは天台の祖師傳てんげん教大師最澄の『末法燈明記』によるも明らかなことであるとせられたのである。而も此の宗祖の説の基礎としては自ら體驗された叡山二十箇の修行と、元祖の下に他力攝生の旨趣を受得された捨聖歸淨しやせうきよの事實のある力強い叫びであることを思はねばならぬ。そこで要するに聖道は權假の法であるから捨て

て眞實の淨土弘願の法に歸せねばならぬと示されたのである、それと同時に「二乗三乗は一乘に入らしめんとなり」(行卷)と云はれ、「方便權門の道路なり」(化卷本)と云はれてあれば、畢竟これまた吾等の機を調へて引入せんとしたまふ佛の善巧方便に出でたるものと感戴せねばならぬのである。

三 末法燈明記

聖道門批判の下に『末法燈明記』が約十紙抄出されてある、この書は傳教大師最澄作としてある。今日其著者に就ては眞撰僞撰の論がある、僞撰説は大師の眞撰である『顯戒論』等と其主張が餘りにも異なると云ふのであるが眞撰説を支持する者は當時の社會狀勢は此の書あるべきであつて、眞撰とすることを妥當なる考へ方であるとするのである。この書の内容は先づ其序説に於て、仁王、法王、眞諦俗諦しんたふくたふ遷ひに因るべきである、然るに僧侶に對する嚴制、時機に應ぜざるものにあらざるやの意を述べ、本文三段初に正像末せうざうまつを決し、次に破持僧はちぢそうの事を定め後に教を擧げて比例し、末法に於ては無戒名字むゐめいめいじの比丘びくのみ存するものなれば、それを眞寶として尊むべきことが論じられてある。これは恰も延曆十七年已來の嚴制が、此書の成りし同二十年に於て緩和されてある事實と合せ考へらるゝものである。今化卷の引用は教を擧げて比例するの一段は經名を列ぬるのみであるが、前二段は中間に乃至の語を以て省略した文字はあるが大體は擧げられてある。先づ正法五百年、像法一千年の説を定め、次

に末法の行相を示されてある。それについて佛滅年代を考へ、穆王五十三年説（延暦二十年まで一千七百五十歳）と匡王四年説（延暦二十年まで一千四百十歳）とを擧げ已に末法か末法に近きものなるかを示し、其末法は但言教のみあつて行證無ければ、若し戒法あれば破戒あるべきも、既に戒法無ければ破戒なし、破戒すらなきに何ぞ持戒あらんと論じ、此時代に持戒の者あれば既に是れ怪異である。市に虎あらむが如きである、故に此時代に於ては無戒名字の比丘を無上寶としなければならぬ。其名字の比丘には畜妻挾子の状態にあるものなどが示されてある。この『末法燈明記』は眞僞撰は果して孰れであるか審かでないとするも、鎌倉時代の新興宗教の原動力たりしことは、今の宗祖の引用の外法然、榮西、日蓮等に引用され、其思想的に強い影響のあつたことに見らる。其中法然上人は『十二問答』（和語燈四、二十三丁）に持戒者の念佛の數少きと、破戒者の念佛の數多きとの勝劣を問はれたのに對して、

○ 答、居てまします疊を押へて言はく、此疊の有にとりてこそ破れたるか破れざるかと云ふことはあれ、つや／＼なからん疊をば何とか論すべき、末法の中には持戒もなく、破戒もなし、唯名字の比丘ばかり有り
と傳教大師の末法燈明記に書きたまへるうへには何と持戒破戒の沙汰をばすべきぞ、かゝる平凡夫の爲に發したまへる本願なればとていそぎ／＼名號を稱すべし。

と云はれ、又『百四十五箇條問答』（和語燈五、十六丁）には、

○ 一、破戒の僧、愚痴の僧供養せんも功德にて候歟、答、破戒の僧愚痴の僧を末世には佛の如く貴むべきにて候也

と云はれた如きがある。如何に其影響があつたかの一端は知らる。宗祖の聖道批判の態度は實にこれによりて妥當なることを見出されたものと思ふ。末法に至つて聖道の行法は如實にゆかない、それは止むを得ざることはあるが、如實でないことは事實である。これによりて吾人が眞に救はるゝことはできない。法が悪いのではなからず時が悪い、機が悪い、法は尊くともそれは畢竟今の時、今の機は救はれ得ないものなることを顯はすに過ぎないものであり、又眞に救はるゝの法は本願眞實の一法のみであることを示さるゝに外ならぬものである。聖道の法はかくの如きものであることは、傳教によりて已に論じ盡されたものであつて、自己の一言でないことを證明されたのである。又これによりて佛教徒の將來が如何にあるべきものであるか、時は末法である、不可能の持戒聖僧の態度は畢竟怪異の存在に過ぎない、末法は末法らしき無戒名字の比丘として、慚愧懺悔の上に本願の救済を仰ぎつゝ生活すべきであることを示されたものではあるまいか。こゝに眞宗の在家止住の生活態度が見出され、それが俗諦生活であつて、眞諦安心と相俟つて二諦相資の宗風となり、今の『末法燈明記』の最初の『仁王法王五顯而開物、眞諦俗諦遞因而弘教』の語が、其宗風を顯はすの典據として擧げらるゝもの偶然でないことが知られ、又三時説の眞意義、更に新生命への復活を意味するのではあるまいかと考へらるゝ。

第六 外道の批判

一 外道の諸相

『信卷』末の眞佛弟子の眞が偽に對して居る、其偽の批判が『化卷』末全部に示された、故に其示されたところは廣いが『信卷』末に六十二見九十五種の外道と云はれたものである。今これを批判するに先づ「夫れ諸の修多羅に據て眞偽を勘決して、外教邪偽の異執を教誡せば」としてあるから、經典の説示によりて其眞にあらず偽なる所以を明らかにして、それを教誡し、外教を捨て、佛教に歸せしめんとせられたのである。それに就いての經釋三十餘文が引かれてある。それは經に於て『涅槃經』『般舟經』『大集經』『華嚴經』『首楞嚴經』『灌頂經』『地藏十輪經』『集一切福德三昧經』『本願藥師經』『菩薩戒經』『佛本行集經』の文あり、論に於て『起信論』、釋に於て『辯正論』『法事讚』『法界次第』『樂邦文類』『天台四教義』『同集解』大智律師『觀經扶新論』『止觀』『往生要集』外典に於て『論語』が引かれてある。其擧げられてある外道の法は天神、鬼神の祭祀、擇時、占相の如きものである。其天神、鬼神は如何なるものであるかに就て、存覺師の『六要鈔』舊末に

月氏晨旦の風教崇むる所の神多くは邪神なるが故に三寶に歸する者、之に事ふること得ず（中略）邪神に事ふ

る者損有て益無きことを誡しむ、權社に於ては此限りに非るか、就中、我朝は是れ神國なり、王城の鎮守、諸國擁衛の諸大明神、其本地を尋ねれば往古の如來、法身の大士、異域の邪神に相ひ同じかるべからず、和光の素意本と利物に在り、且つは宿世値遇の善縁に酬ひ、且は垂迹多生の調熟に依て今正法に歸して生死を出でんと欲す、其神恩を思ふに忽緒すべからず、然りと雖も一心一行を專にせんと欲す、稱念の結縁猶且く之を闕くは一宗の廢立、大師の定判なり。

とあるのは正しく月支、震旦の邪神であつて、日本の權社ではない。併し、權社に於ても其御本意を忘れて、一向専念の宗義を失ふやうのことあれば廢しなくてはならぬとせられたのであらう。故に今日にしても、國神は月支震旦の宗教神と異なる非宗教神なるを誤りて、宗教神として宗教的信仰を捧げんとするならば、外教邪執として取り扱はねばならぬのであらう。故に國神を正しく取り扱ふ場合には今の論外であるとせねばならぬ。又宗祖が此の外道として取り扱はるゝものに、當時の佛教徒の外道行爲のあつたことを深く注意しなければならぬ。外道としての外道よりも、佛道としての外道こそ眞偽勘決の必要が最もあつたものと思ふ。そのことは『述懷和讚』に

五濁増のしるしには

この世の道俗ことごとく

外儀は佛教のすがにて

内心外道を歸教せり

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつゝ

卜占祭祀つとめとす

僧ぞ法師のその御名は

たうときことゝきゝしかど

提婆五邪の法ににて

いやしきものになづけたり

外道梵士尼乾志に

こゝろはかはらぬものとして

如來の法衣をつねにきて

一切鬼神をあがむめり

かなしきかなやこのごろの

和國の道俗みなともに

佛教の威儀をもとゝして

天地の鬼神を尊敬す。

とあるので充分に知らるゝのである。其他特に『辯正論』が長く引用されてあるのは道教の批判を擧げられものであつて、そこまでに及んで居る宗祖の用意の周到なることを深く感戴すべきことと思ふ。

二 批判の大意

外道に對する批判は現世祈禱としての排斥であつた、宗祖の現世祈禱に對する態度は『高僧和讚』の善導讚に

佛號むねと修すれども

現世をいのる行者をば

これも雜修となづけてぞ

千中無一ときらはるゝ

とあるので簡明に知れるのである。即ち其人が稱名念佛の行者であつても、現世祈禱の心ある者は尙ほ眞實の信仰に達せざる雜修の人であると、雜修の部類に收めて排斥されてある。今の批判また畢竟それである。ところが今は最初に偽である外教邪偽異執であると云はれた已外には御自釋はない、他は引文のみである。しかし、其引文の上に其意が充分見らるゝ、今其一端を窺ふに、先づ世人の多く現世祈禱の對象とする天龍鬼神日月星辰はすべて、それが善神である限りには正法の人を護持するから、眞の信仰の人は護持せられ、悪神は必ず畏怖して去るから、これを祭祀し、これに祈禱する必要がないとするのである。『大集經』の引證が十文あるが多くこれである。これは『現世利益和讚』に、

天神地祇はことゝく

善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに

念佛のひとをまもるなり

願力不思議の信心は

大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神

みなことゝくおそるなり

とあるも同趣意である。又鬼神祭祀や、吉良日を選び、卜占などをするのは餘道であつて、正法に違する邪見であるから爲すべきでないとする。『大集經』月藏分第五の諸惡鬼神得敬信品の文を引かれたものに邪見を遠離する因縁の十種功德を列ねらるゝものに、

一には心性柔善にして伴侶賢良ならむ、二には業報乃至奪命あることを信じて諸惡を起さず、三には三寶を歸敬して天神を信ぜず、四には正見を得て歲次日月の吉凶を擇ばず、五には常に人天に生れて諸の惡道を離る、六には賢善の心を得て明人に讚譽せらる、七には世俗を捨て、常に聖道を求めん、八には斷常の見を離れて因縁法を信ず、九には常に正信正行正發心の人と共に相會り遇はん、十には善道に生ずることを得ん。とあり、又『藥師經』を引いて

世間の邪魔外道、妖嬖の師、妄に禍福を説くを信じて、便ち恐動を生じ、心自ら正しからず、卜問して禍を覓め、種々の衆生を殺して神明に解奏し、諸の魍魎を呼で福祐を請乞し、延年を欲冀して終に得ること能はず、愚痴迷惑して邪を信じ倒見し、遂に横死せしむ、地獄に入りて出期あることなし(乃至)八には横に毒藥厭禱、咒咀、起屍鬼等の爲に中害せらる、

と示してある如きに、其意が見らる。又鬼神等は多く餓鬼惡魔の如きもので人間已下の者であるから、これを祀ることは有害無益であるとする。これは『天台四教儀』等によりて示すもの等此意である、最後に『論語』の語を季路問事鬼神、子曰不能事、人焉能事鬼神と點する如き亦其意が明らかに見らる。そうして鬼神祭祀が此の如きものであるに關らず、其説あるは畢竟誘俗の方便であることを、『樂邦文類』に出づる慈雲大師の語を擧げて、

然るに祭祀の法は天竺の韋陀、支那の祀典既に世論を逃がれず、眞に誘俗の權方なり

と示されてある、これ等を以て其意の大體は知らる。ところが此の外教の中にもおのづから、これによつて次第に導いて進ましめらる、階梯方便の意味が見られてある、『辯正論』を引用せらるゝ中に、

二皇化を統べ(須彌四域經に云く應聲菩薩を伏羲となす、吉祥菩薩を女媧となすと)淳風の初に居り、三聖言を立て、(空寂所問經に云く加葉を老子となし、儒童を孔子となし、光淨を顔回となすと)已澆の末に興る、玄虚沖一の旨、黄老其の談を盛にし、詩書禮樂の文、周孔其の教を隆くす、謙を明にし、質を守るは乃ち聖に登るの階梯、三畏五常は人天の由漸となす、蓋し佛理に冥符すれども、正辯の極談に非ず

とあるが如き、二皇三聖と權化し、階梯由漸の教を施されたものと見られたと云はる。そこにまた古聖や神明の結縁の恩を思ふべきことも自ら顯はされてある。御消息集第四章の如き、また此意が示されてある。

已上要門、眞門、聖道、外道を或は假、或は偽として簡び捨て、眞實に入ること示さるゝと同時に、それ等の教法が悉く我等を哺み育て、眞實へ誘引せらるゝものであることを教へられた。吾人はこれが偏へに宗祖の徳底せる信念と明敏なる思索と、教へずして生まれぬ悲心とによりてありしものと、深く頂戴するのである。

第七 後序の 大旨

五四

最後に『教行信證』一部に亘るべき後序が置かれてある、末三十九丁右竊以已下がそれであることは上に述べた如くである。こゝには承元の法難に於ける師弟の遠流から、恩師法然上人の御往生を語り、更に『選擇集』の相傳、眞影の圖畫を記して、傳承の厚きを喜び、よりに此の書の製作ありしことを述べて、

慶しき哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す、深く如來の矜哀を知りて良に師教の恩厚を仰ぐ慶喜彌々至り、至孝彌々重し、茲れに因て眞宗の詮を鈔し、淨土の要を據ふ、唯佛恩の深きことを念て人倫の嘲を耻ぢず、若し斯書を見聞せん者、信順を因となし、疑謗を縁となして、信樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯はさむ、安樂集に云く、眞言を探り集めて往益を助修せしむ、何となれば前に生れむ者は後を導き、後に生れむ者は前を訪らへ、連續無窮にして願くは休止せざらしめんと欲す、無邊の生死海を盡さむが爲の故なりと已上、しかれば末代の道俗仰で信敬すべきなり、知るべし、華嚴經の偈に云ふが如し、若し菩薩種種の行を修行するを見て、善不善の心を起すこと有りと、菩薩皆攝取せんと已上

と云はれてある、これが一部最後のお言葉である、吾人は唯繰り返し拜讀して、御思召のあるところを有り難く頂くのみである。(昭和一〇、一〇、一四記)

聖典講讀全集第十二回配本・昭和十年十一月十日
印刷・昭和十年十一月廿五日發行・編輯者宇野圓空・
發行者東京市小石川區諏訪町五九番地小山久二郎
印刷者東京市牛込區改代町二四番地田中末吉・
發行所小山書店・版權所有宇野圓空及小山久二郎